えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第77号
平成26年
(2014)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集「江戸博 20 年の歩み、あれこれ－小林副館長に聞く－」……1～2
新年祝辞　江戸博竹内館長・友の会畠中会長 ……2
見学会「国宝妻沼聖天・忍城址・さきたま古墳群を巡る」(バスツアー) ……3
えど友広小路 ……4～5
会員からの投稿「桜田門渡櫓に潜入」、「相撲写真資料館」／サークル紹介「江戸東京を巡る会」／えど友サークルだより / 友の会めも
友の会セミナー「利根川改変と江戸の開発」……6
友の会セミナー「和食の文化、江戸っ子の食」……7
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪－その 9」……8
学習会「新宿歴史博物館」……9
江戸博クリップ「新発見物語」……9
江戸名所図会を歩く⑪「三田八幡宮から高輪ヶ原」……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

新春特集

江戸博20年の歩み、あれこれ

－小林副館長に聞く－

あけましておめでとうございます。昨年から続いた20周年記念事業も今年3月で終わり、江戸東京博物館の新たな一歩を踏み出す年が始まります。そこで、開館20周年記念特別展「明治のこころ－モースが見た庶民のくらし」の開催でお忙しかった小林淳一副館長に貴重なお時間をさいていただき、江戸博創立当初のエピソードや江戸博のこれからについてお聞きしました。

◆江戸博スタート時のことをいろいろ教えて下さい

江戸博ができる前、東京都に美術館、公文書館、図書館はありましたが、なぜか博物館はありませんでした。上野の東京国立博物館をはじめ、東京には国立や私立の大規模な博物館があるためか、東京都立の博物館は必要なかったのかな、などと勝手に思い込んでいました。

江戸博の設置は「マイタウン東京構想」の一環として位置づけられました。どのような博物館にするのか、のちに初代館長になる児玉幸多先生、第2代の小木新造先生、そして現職の竹内誠館長をはじめ、東京都が学識経験者で構成される懇談会をつくり、基本構想を練り上げ、江戸東京博物館建設準備室がスタートしたのです。名称は江戸と東京を連続的に捉えるという意味から、東京都立博物館ではなく、博物館の設立趣旨にのっとり「江戸東京博物館」という明確なネーミングとなりました。

博物館建設地については各区から誘致があり、日比谷公園、木場公園、水元公園、小金井公園などの候補地が挙がりましたが、最終的に両国の青果市場跡と、国鉄の操車場を合わせた敷地に決定となりました。また野外展示施設は小金井公園内に「江戸東京たてもの園」が江戸東京博物館の分館として発足します。たてもの園は昨年、30棟の移築のすべてが完了しました。自然に恵まれた多摩の地で、東京の歴史的建造物に親しめる都民の憩いの場となっています。

江戸博は国宝や重要文化財などの

▲小林淳一副館長

指定品1点1点を展示ケースの中で鑑賞するといった従来型の手法はとらず、テーマを江戸東京に特化して大胆な展示を目指しました。日本橋、中村座、朝野新聞社などの原寸大模型、学術的に考証された精緻な縮小模型、豊富な実物資料、多彩な体験型資料などを組み合わせた展示は、江戸博ならではのユニークな内容といえましょう。

◆資料の収集はさぞたいへんだったでしょうね？

建設準備段階で現・江戸東京博物館客員研究員の近松鴻二さんと私の2名が専門職として初めて採用されました。入って驚いたことは、収蔵品はほとんどなく、ゼロからスタートしなければならなかったことです。ですから、その当時、もっとも力を注いだことは博物館の要ともいえる資料の収集でした。近松さんは江戸ゾーン担当になり、古文書や刷り物などの収集。私は東京ゾーン担当になって、生活民俗資料の収集に取りかかったのが初仕事でした。

東京都広報などに告知して都民から寄贈品も募りました。寄贈してくださった方々を訪ねた際、もう10年早く来てくれればもっといろいろなものがあったのに、とよく残念がられました。東京は関東大震災や空襲で甚大な被害をこうむりましたが、さて生活史の観点から考えると、戦後の高度経済成長こそが都民に大きな生活の変化をもたらしたのではないでしょうか。

この時代に都民の足跡を証する身の周りの多くのものが失われたと実感しています。大量生産・大量消費は当たり前、簡単に物を捨てて新しいものを買うといった風潮のころです。まだ日本語の「もったいない」(MOTTAINAI)などという環境問

題のスローガンが出現する前のことでした。常設展リニューアルでは、そんな高度経済成長下の東京の生活の諸相も取り入れたいと考えています。

常設展示室の「生活革命」のコーナーに古い冷蔵庫や洗濯機が展示されていますが、あのなかには清掃局からもらったものがあります。初期の電化製品はメーカーやディーラーでも保存するという意識が薄くて、廃棄され入手が困難でした。でも東京ゾーンの展示に、たとえば手回し式洗濯機などは不可欠ですから、東京都清掃局の清掃事務所長会議に乗り込んで行って、こういう物が粗大ゴミで出たらご一報下さい、とお願いしたりしたのです。結果、けっこう収集できました。

連絡があると、すぐにトラックで清掃事務所に駆けつけて運んでくる。これが新聞の記事になり、まだ建物もできてないのに「江戸博、粗大ゴミから博物館資料の収集」という見出しになって紙面に大きく掲出されてしまいました。記事の内容は好意的なものでしたが、当時の生活文化局長から、一生懸命にやるのはいいけど、江戸博はゴミを集めている、なんていうような誤解を招かないように、との苦言を呈されてしまいました。私がまだ駆け出しのころのことです。いまとなっては30年以上も前の懐かしい想い出です。

また大型コレクションでおもに手掛けたものは、浅草・上野関連資料群の喜多川コレクション。ご遺族と交渉して一括寄贈を受けました。また明治期の器物の赤木コレクションは数年をかけて収集しました。このなかに含まれる「旧江戸城写真原板」は、のちに重要文化財に指定されました。どちらも常設展示室で活用されています。

◆ボランティアや友の会の活動についてお聞かせ下さい。

いま江戸博では展示解説ガイドのボランティアの皆さん236人にさまざまな活動をしていただいております。おもにお客さまへの解説や普及事業をお願いしていますが、来館者、とくに外国人の方々にとても好評です。お礼状が届くことも多々あるそうです。イヤホンガイドの充実も図りますが、やはり直接に顔を合わせての対応は、「おもてなし」の最たるものです。これはボランティアの皆さんの協力を仰ぎつつ、今後とも大切にしていきたいと考えます。

ボランティアといえば、私はモース・コレクションを所蔵する米国ピーボディー・エセックス博物館に1年間、客員研究員として滞在した経験があります。そこで感じ入ったことの一つに、市民のボランティア活動への参画の仕方があります。アメリカの博物館のほとんどは財団運営で公設ではありません。いわゆるインディペンダント・ミュージアムです。企業や個人などのメンバーシップにより会費や協賛金を募って館を運営しています。

ピーボディー・エセックス博物館のボランティアはツアー・ガイドのほか、展示物の制作や補修、観覧の受付補助、資料カードの番号順並べ換え、はては白手袋の洗濯やアイロンがけまであらゆることに従事していました。自分の能力、得意の分野、好きなことで社会に貢献するということが生活のなかに根付いていると感じました。ボランティア活動は、それぞれの国や地域により、市民のさまざまな関わり方があるものです。

友の会は展示ガイド・ボランティアの有志が発起人になって準備を進めつくられました。江戸博のサポーターとして独立しています。ほかの博物館や美術館でも友の会はありますが、江戸博の友の会のように自分たちで自主的に企画立案して活動しているところは、あまりないでしょう。そのため、毎年総会を開いて事業計画から会計報告にいたるまでの決議をし、きちんとした運営がおこなわれています。

◆江戸博のこれからについて、抱負をお聞かせ下さい。

開館20周年特別展はこの3月から始まる「大江戸と洛中」展が最後となります。開館以後の江戸博の成長を考えますと、私たちはいよいよ「第2ステージ」(竹内館長の言葉)を迎えると認識しています。その最大の事業はいうまでもなく「館の顔」たる常設展のリニューアルです。展示室の劣化改修がおもな目的ですが、装いも新たに、さらに進化をさせたい。とくに「教育普及」を重点とし、ベテランが見守るなか中堅・若手の人たちに果敢に取り組んでもらいたいと考えています。常設展リニューアルを契機に、東京都の文化施設として、館の事業はむろんのこと、あらゆる点で質の向上を追求していきます。

首都東京の文化施設としての役割を熟考し、江戸東京博物館が東京都民をはじめ、内外から訪れる人びとの「心の豊かさの拠り所」となることを目指したいと思います。

聞き手・文・写真：広報部会・中村貞子

新年祝辞

江戸東京博物館　館長　竹内　誠

新年おめでとうございます。
昨年は何かとご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

江戸博はこの春で20周年記念事業を無事終了することになり、新たな再出発へのステージへと向かいます。その象徴的事例が今年の暮れから来春にかけて実施される常設展示室のリニューアルです。

また2020年の東京五輪開催が決定し、江戸東京文化の発信拠点である当館の国際的役割への期待がますます高まっています。

幸い、昨秋のニューヨーク・タイムズ紙上の「もし東京に36時間滞在したら」という記事に、浅草・六本木などと並んで、都内の博物館・美術館としては唯一つ、江戸博だけがツアーコースに推薦されていました。こうした気運が助長されれば将来、江戸博友の会にも強力な海外部会ができるかも知れません。

江戸博最強の応援団である友の会の一層のご発展をお祈り致しますと共に、本年もよろしくご鞭撻の程、お願い申し上げます。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　畠中　勇

あけましておめでとうございます
会員の皆様には良いお年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

今年も友の会では、古文書講座、セミナー、江戸東京の歴史を訪ねる館外活動など、多彩な事業を実施してまいります。友の会では、今後とも会員の皆様にご満足いただけるよう一層魅力ある事業を展開してまいりますので、なにとぞご協力をよろしくお願い致します。

会員数ですが、関係者のご努力により、現在これまで最高の1660人を超える人数となり、会の安定的運営の確保ができるようになりました。

会の運営は、江戸東京博物館のご支援を得ながら、会員のボランティアによる事業、広報、総務の各部会員により支えられていますが、この自主、自立した友の会活動は、私たちの誇りでもあります。現在各部会とも、応援していただける部会員募集中です。会の充実発展のため、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成25年10月3日）

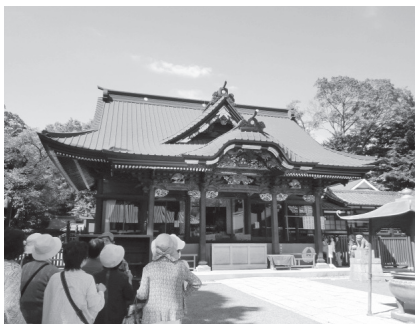
「国宝妻沼聖天・忍城址・さきたま古墳群を巡る」（バスツアー）

２つの台風をかいくぐって、出だしは運よく晴天に恵まれ、３台のバスは参加者115人を乗せ埼玉へ出発しました。

妻沼聖天山

夏のような日差しの中、交通渋滞で1時間近く遅れての到着。さっそく「阿うんの会」の方々のガイドで拝観しました。総門である「貴惣門」(国重要文化財)は錦帯橋を架けた長谷川重右衛門が妻沼(熊谷市)を訪れた時、地元の工匠林正清に託した設計図をもとに、約100年後林正道が嘉永4年(1851)に竣工しました。飾り・台座には寄進者の名前が記され、地元の聖天山への厚い思いに感銘しました。

参道の途中には、聖天山を創建した斎藤実盛の像が、平家物語で有名な逸話の鏡を持ち建っていました。「御本殿」(国宝歓喜院聖天堂)は江戸中期に地元の再建勧進のもと、林正清、正信親子が25年の歳月を費やし宝暦10年(1760)に完成しました。



▲妻沼聖天　本殿正面

権現造りで各部材、各壁面すべてが色鮮やかな彫刻で埋め尽くされた壮麗な建物です。雲一つない晴天の下、平成23年に彩色復元された本殿の彫刻には「七福神」唐子遊び、中国の故事を題材としたものが並び、「鷲と猿」には伝説的な彫刻職人名である左甚五郎作とする伝承があります。最後に本殿正面脇の装飾の中に隠れた子猿の彫刻を探すなどしてその素晴らしさを堪能することができました。

▲妻沼聖天　本殿左側面

忍城址・郷土資料館

行田市内で食事を終えた後、昨年公開の映画「のぼうの城」で話題になった「忍城址」に向かいました。忍城址は公園に整備され、阿部氏が築いた御三階櫓を模した櫓が再建され郷土資料館が付属しています。観光ガイドさん達とともに「忍城おもてなし甲冑隊」の歓迎を受けました。

▲忍城御三階櫓

城門前での甲冑を着ての演舞パフォーマンスに忍城の歴史を感じることができました。ガイドさんによる忍城址の江戸時代に造られた土塁、石垣、門の案内も資料館での藩の歴史や地形の模型などの展示もわかりやすく、御三階櫓最上階からの展望も楽しみました。

さきたま古墳群

急に雲行きがおかしくなった空を心配しながら、観光ガイドさんもバスに乗り込んで「さきたま古墳群」のある「さきたま風土記の丘」に向かいました。バスの中ではガイドさんから忍城の濠だった水城公園の池や、天正18年(1590)6月の石田三成による忍城水攻めの「石田堤」の堤の址の紹介やお話を聞きました。

「石田堤」の址を歩いて石田三成の本陣があった「丸墓山古墳」に登りました。目の前によく見える「忍城址」の櫓に納得し、のぼう様が踊ったという場所(田んぼ)を教えてもらいました。反対側にある銘文の刻まれた鉄剣が出土した「稲荷山古墳(前方後円墳)」の名称などのくわしい説明では、稲荷社が円墳の上にあったおかげで古墳の礫槨がそのままの形で出土したとの話に歴史の不思議と偶然を感じました。

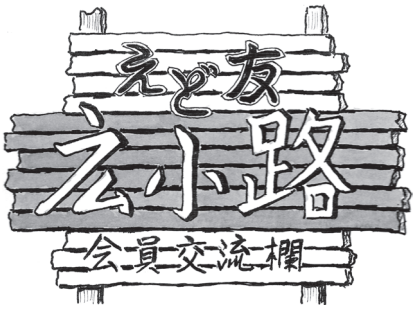
ぽつぽつと降ってきた雨の中、「さきたま史跡の博物館」を見学しました。学芸員の方に国宝の「金錯銘鉄剣」ほか出土品の展示の説明を受けました。鉄剣に銘文の刻まれていることがわかった時のエピソードは興味深かったです。

博物館から出ると、雨が夕立のように急に強く降ってきました。そのため「石田堤」が決壊した場所をバスから降りて見学する事ができなくなり、車中からの見学になりました。決壊場所(堀切橋)まで観光ガイドの方々の説明を受け、最後にお見送りをいただき、16時40分に帰途につきました。

▲丸墓山古墳

目まぐるしく変わる天候でしたが、それぞれの場所で十分なガイドをしていただき参加者全員の興味を満足させることができたのではないでしょうか。

【記録】文：広報部会・佐藤美代子
写真：同・国定美津子



会員からの投稿

東京文化財ウィークで桜田門渡櫓に潜入

谷口幸二

毎日、多くのランナーが走り抜ける江戸城桜田門の渡櫓、その内部に入る機会を偶然にも得た。『東京文化財ウィーク2013』のガイドブックにあった「江戸城ウォーク」に応募した結果である。募集要項には「皇居東御苑など江戸城及び江戸城関連の史跡をめぐります」とのみ記載されていて、わざわざ参加しなくてもいいようなコースであったので、軽い気持ちで応募した。しかし、参加通知のハガキを受け取って驚いた。「なお、今回は環境省の協力のもと、江戸時代の桜田門渡櫓を特別公開します」とあるではないか。

11月3日、ワクワクする気持ちを抑えて、皇居前広場を通って集合場所の桜田門前に向かった。しかし、いつも開いている渡櫓門の門が閉じられ、脇門しか開いていない。とにかく枡形の中へ、すると高麗門もしっかり閉じられ、中央部分に付けられた潜り門をくぐり抜けて出入りするしかない。いつもいるランナーの姿が見えないはずである。その潜り門を抜けて集合場所へ急ぐと、応募者多数につき参加人員を40名に増やして抽選を行った結果の、ラッキーな参加者が集まっていた。

「非公開の渡櫓の内部を特別に公開するので、写真撮影は禁止です」という、かなりショックな注意事項を受けて、いよいよ渡櫓内部へ潜入…。しかし、少しは想像していたものの、渡櫓内部は写真撮影をするまでもなく、ガランとした広い空間が広がっているだけで、少々ガッカリ。とはいえ気を取り直して奥へ進んだ。環境省の職員から、今回の保存修理の状況の説明を受け、隅々まで見て回った。渡櫓の枡形に面した隅の床板を外し、その下にある引き手の窪みがつけられている板を手前に引くと、そこにはなんと石落としの穴がぽっかり。ここから門に取り付く敵目掛けて石を落とし、又は熱した油を浴びせかけるのだろう。南側の窓の外を眺めてみた。安政7年(1860)3月3日五ツ半ころ、大老井伊直弼を乗せた駕籠は60余名の行列に守られ、雪の中を外桜田の藩邸を出て江戸城に向かってきた。行列が桜田門外の杵築藩上屋敷の門前に差し掛かった時、水戸脱藩浪士らの襲撃を受け、直弼はあえなく首を刎ねられる。桜田門外の変である。その現場が、指呼の間に見降ろすことができる。襲撃は短銃の発砲に始まったというから、桜田門を警備する者たちは、当然襲撃に気づき、私が覗いている窓からもそれを見ていただろう。何もできず、ただ茫然と…。とにかく40分余りの桜田門渡櫓内の見学は終わった。

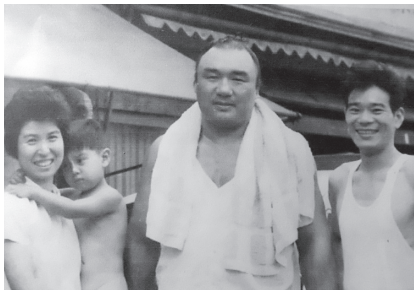
―両国周辺散歩 小さな博物館―「相撲写真資料館」

井上敏子

お相撲さんとの思い出

江戸の両国界隈と言えば、昔は今以上にお相撲さんが町を闊歩していました。私の家がある墨田区の緑地区には、当時関脇だった鶴ヶ嶺が在籍していた井筒部屋があり、私の家の前をよく歩いていました。

ある夏の暑い日、まだ幼少の長男が行水をしている時に、ちょうど鶴ヶ嶺がやってきたので声をかけて、すっぽんぽんの長男を抱きかかえて、記念写真を撮りました。この写真は、私にとって永遠の宝物です。写真は、その瞬間のできごとをそのまま見事に切り取り、時間を超えて記憶を見える形で残してくれます。井筒部屋は両国2丁目の回向院の南に移りましたが、その回向院の東に「相撲写真資料館」があります。


▲鶴ヶ嶺関と記念写真

小さな相撲写真資料館

「相撲写真資料館」はJR総武線両国駅東口から南へ徒歩5分、回向院の東の裏通りに開設されています。昭和61年から墨田区の“産業や文化”に関するコレクションを紹介する「小さな博物館」運動の一環です。

70年の間、相撲協会の専属だった写真館により、歴代の横綱や優勝力士などが写真で紹介されています。

この「工藤写真館」が両国や相撲の歴史を撮り続けてきたことは、とても素晴らしいことだと思います。

昭和30年代当時、今の緑図書館の場所に緑幼稚園がありました。元は、力士の冨士ヶ根親方が園長さんをしていて、当時、話題になった幼稚園でした。その幼稚園に長男が通っていた頃、工藤写真館の先代社長さんにはたくさん記念写真を撮ってもらいました。お遊戯会やクリスマスパーティー、運動会や遠足等たくさんの思い出が残っています。お遊戯会の踊りはぎこちなかったですが、写真に残る姿は親にとってはいつまでも当時の可愛いしぐさを思い出させてくれます。

開館日は火曜日だけ

現在、資料館の館長は工藤明さんです。先代が昭和4年(1929)に、旧両国国技館の脇に写真館を開業して以来、相撲協会の専属写真館として、公式行事や幕内力士や相撲部屋の様子を写真に収めてきました。資料館はその写真を場所ごとに約70枚展示しています。なお、近くの本所松坂町公園は「吉良邸跡」です。

相撲写真資料館の開館は火曜日のみ。ただし、初場所や5月・9月場所の開催中は毎日開館しています。午前10時から午後5時。電話03-3631-2150　〒130-0026 墨田区両国3丁目13番2号。

えど友 サークル紹介

◤江戸東京を巡る会◢

テーマを決め江戸東京を気楽に歩き回る当会は、メンバー77人、開催数30回に達する人気のサークルです。平成18年に磯邊晃さんが設立、今年から小林弘明さんが世話人を務めています。現在のテーマは「歳時記シリーズ」、季節を彩る風光明媚な場所を2カ月に1回くらいの頻度で不定期に巡っているそうです。今回参加したのは、その4回目で、「小春の一日を向島百花園で香道と初冬の粧いの園内散策を楽しむ」がお題です。11月9日(土)、参加者40人が東向島駅に集合しました。

向島百花園は、大名庭園ではなく、中下級武士や町人等、文人墨客が造り上げた庭園だそうです。雑多に草木や花木が広がる庭の中には、春や秋の七草をはじめ、万葉集や詩経など、和漢の古典に読まれている由緒ある草木類が植え込まれています。小鳥がさえずる風雅な庭を、ガイドさんの説明を聞きながら歩きます。文化・文政期に町民が力を持ってき

▲向島百花園に入る

た頃、庶民が隅田川を渡り、四季折々の季節と花を愛でつつ歩いた1日ハイキングコースの名所だとか。数百年の隔てた今、本サークル「江戸東京を巡る会」では、その気持ちを共有しているようです。

その後、園内の御成座敷と呼ばれる数寄屋風の和室に入り、香道を体験します。香道家の方に説明を聞いた後、藤原定家の名歌「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」からイメージした香木を味わいます。今回の香木は、伽羅と佐曽羅の香りを比較します。最初は皆さん緊張し、ぎこちない動きでお道具を触っていましたが、やがて集中して香りを味わっていました。何とも優雅な遊びです。

秋の澄んだ空気を味わい、花木を愛で、昔ながらの香木を楽しみ、古典に思いを馳せ、そして、遠くにはスカイツリーの姿。粋な江戸東京を現代の文人のごとく楽しむ、風流人の会でした。

【記録】文・写真：広報部会・深尾恵美子

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月8日(火)会員会議「今年度の反省と来年度の計画」を協議した。参加者13人。

11月10日(日)「深川江戸資料館」にて山内啓巳氏(芸名：太尾亭狸久)が所属する素人落語会集団「楽笑」の発表会を観賞した。100人を超す愛好家を前に6人の演者の中、狸久氏は「佃祭り」を30分近く熱演した。参加者12人。

◆藩史研究会

10月11日(金)西村英夫さんによる国宝であり、世界遺産登録の名城姫路城を有する「姫路藩」の発表があった。参加者19人。

11月8日(金)土屋献一郎さんによる「薩摩藩島津家」の発表があった。今回で100回を迎え、友の会畠中会長、友の会松原前会長、広報部会より中村部会長も聴講され、熱の入った発表だった。参加者24人。

◆古文書で「八犬実記」を読む会

10月10日(木)参加者8人、10月25日(金)参加者6人、11月14日(木)参加者8人。11月22日(金)参加者6人。

◆江戸東京を巡る会

11月9日(土)初冬の向島百花園を2組に分かれガイドの案内で散策後、御成座敷で宮俊さん、竹中祐見子さんの指導で香道の手ほどきを受けた。参加者40人。

◆江戸名所図会輪読会

10月17日(木)大澤憲一さんが担当で、実相院～氷川明神社を発表。参加者17人。

11月21日(木)関谷行子さん担当で帯刀先生義賢之墓～吉祥院を発表。参加者21人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

10月27日(日)参加者32人。10月31日(木)参加者46人。

両日とも「えど友」第61号10頁の「落語で江戸散歩⑳なめる」をなぞって、押上～業平橋～言問橋～浅草猿若町碑～市村座跡碑～かっぱ橋道具街～源空寺～法善寺～五條天神社旧地の碑～守田寶丹薬局～不忍池へと巡った。

11月28日(木)「えど友」第65号10頁の「落語で江戸散歩㉔王子の狐」をなぞって、王子～装束稲荷神社～扇屋～久寿餅・石鍋～王子稲荷神社～名主の滝公園～紅葉寺～正受院～不動の滝跡～王子神社と巡った。参加者41人。

◆日本の大道芸伝承会

10月17日(木)9月22日(日)に参加した深川江戸資料館のイベントの反省会をした。参加者3人。

11月3日(日)世田谷区上祖師谷神明社境内での「地域自治会祭り」で演技披露した。参加者3人。

11月17日(日)世田谷区桜上水の「土と農の交流園」で開催された秋祭りに参加し、演技披露した。参加者3人。

◆江戸を語る会

11月30日(土)第1回目の会合は、江戸の町名について各自が思い出、所感など話し合った。参加者8人。

＊　＊　＊　＊

●**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しております。参加希望の方ははがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出た時だけ先着順に参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成25年10月～11月

◆役員会10月8日(火)14人。11月12日(火)13人。◆三部会交流会10月8日(火)37人。◆事業部会10月1日(火)22人。11月5日(火)21人。◆総務部会10月1日(火)23人。10月22日(火)16人。11月26日(火)26人。◆広報部会10月15日(火)10人。11月19日(火)12人。◆古文書講座入門編10月9日(水)午前78人・午後76人。初級編10月16日(水)台風関東接近のため休会。11月27日(水)午前51人・午後49人。中級編10月12日(土)午前33人・午後25人。11月16日(土)午前26人・午後29人。◆町方書上翻刻プロジェクト10月3日(木)A7人・B3人。10月17日(木)A8人・B9人。11月7日(木)A7人・B9人。11月21日(木)A7人・B8人。

第134回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成25年10月20日）

「利根川改変と江戸の開発」

講師　橋本直子さん（葛飾区郷土と天文の博物館学芸員）

利根川の河川環境

関東平野は北から西の周りを火山で囲まれており、中央を西から東へ横切って太平洋に注ぐのが、我々が認識している利根川です。千葉県の関宿から江戸川が分かれて東京湾に注いでいます。利根川の長さは信濃川に次ぐ第２位ですが、流域面積は日本一です。東京低地はこの利根川水系の一員で、この河川をいかに治めるかが、江戸時代から現在に至る大きな課題です。

２万年前の氷河期には、利根川は荒川と一緒になって東京湾に流入していました。また、東側の東京低地には渡良瀬川が南下していました。1万年前に氷河期が終わると、海水面の上昇による6000年前の縄文海進で内陸まで海が入り込み東西の入り江が形成されます。その後、河川の堆積物によって海岸線は次第に前進します。1500年前には利根川は荒川と離れて渡良瀬川と合流し、西の谷から東の谷に移っていきます。600年前の中世末期にはほぼ今の水系が出そろいました。

利根川の河道変遷

16世紀後期から17世紀にかけての約100年間、関宿周辺の河川は激しく様相を変えました。一般的には「東遷事業」といわれますが、私は河川に主体性を持たせるという意味で「改変」という言葉を使っています。河道を復原するに当たっては1980年代以降に新たに確認された古文書類、絵図、近代的測量地図、空中写真を活用して分析を行いました。

利根川の改変に関わった川としては、合（あい）の川・会（あい）の川・浅間（あさま）川・古（ふる）利根川・新川通・赤堀川・権現堂川・庄内古川・逆（さかさ）川・江戸川があります。これらの川の開削・締切りによって利根川は何度も流れを変え、東にあった常陸川水系と一本化していきます。現在の水系が完成するのは承応３年(1654)です。開始時期は従来の説では文禄３年(1594)とされていましたが、新史料により天文15年(1546)にさかのぼることが確認されました。

利根川改変と新田開発

「新田」というのは「本田」に対する言葉で、一般的には戦国時代以降に開発された土地をさします。江戸幕府は享保年間(1716～1736)に年貢増徴策の一環として新田検地条目を発し、全国的な耕地開発を奨励していきます。18世紀中期以降は水田開発が限界に達しますので、武蔵野新田に代表されるような台地上の畑地を開発していきます。つまり、新田といっても畑も含むわけです。

開発された新田の概念図ですが、村の周辺を開発した「切添（きりぞえ）新田」、村から離れたところを開発した「出（で）新田」、新しい村ができる「村立新田」があります。さらに荒地などの未開発地が残るということになります。新田として開発される場所は台地、湿地・沼地・干潟・三角州などです。

耕地開発の基本史料としては検地帳がありますが、現在ではほとんど残っていません。そこで有効になってくるのが石高のデータです。石高は一種の生産高指数と考えられますが、耕地の生産量をすべて米の生産量に換算したものです。全国の石高を調査したものには『正保郷帳』(1650)、『元禄郷帳』(1697)、『天保郷帳』(1834)、『旧高旧領取調帳』(1871)があり、全国各地の石高増加指数を知ることができます。

利根川が改変された流域の耕地開発は、利根川が東に移されるのに伴って足立郡、埼玉郡、武蔵国葛飾郡、下総国葛飾郡の順に進行していきます。葛飾郡はもともと下総国に属していましたが、河道の改変によって国境が変わり、近世には江戸川から西が武蔵国になりました。最後まで利根川の影響を受けた下総国葛飾郡では、利根川が太平洋に導かれ、江戸川が開削されたことによって、急速に耕地開発が進展しました。これは下総国葛飾郡の石高増加率が他の３郡に比べてかなり高いことに現れています。

近世葛西領の開発

東京低地は江戸時代には葛西領と呼ばれていました。中央の中川を境に東西に分かれ、さらにそれぞれが南北に分かれ、東葛西領上之割・下之割、西葛西領本田筋・新田筋となります。新田筋はもともと海でした。東葛西領は比較的古くから開発が進んだところで、上之割では全24カ村中6カ村が新田、下之割では27カ村中4カ村が新田です。西葛西領では本田筋にもいくつか新田があります。新田筋は32カ村中半分以上が新田です。

江戸湾沿岸は干潟の発達が顕著であり、江戸の人口増加による新たな市街地の必要性から、隅田川河口部の干潟が宅地や耕地として造成されていきます。造成の方法は干拓と埋め立てですが、用いられたのは江戸城下から排出された最終ゴミや水路ざらいの土砂です。こうして開発された新田筋には十五万坪(木場)、六万坪(石小田新田)、御材木蔵跡(毛利新田)、十万坪(千田新田)、越中島新田、平井新田などがあります。

利根川の改変は江戸の後背地である中川・東京低地の開発を進めました。また、湾沿岸部の干潟開発は拡大する江戸の市街地となったことに特色があります。改変によって水害が少なくなったということが、開発を推進したといえますが、反面土地の性質からくる諸災害への対応も必要といえるでしょう。

参加者123人。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

第135回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成25年11月23日）

「和食の文化、江戸っ子の食」

講師　大久保洋子さん（日本家政学会食文化研究部会長）

はじめに

「和食；日本人の伝統的な食文化」がこのほどユネスコの無形文化遺産に登録されることがほぼ確実になりました。（＊）

島国である日本には特有の文化が作られ、約2000年にわたって培ってきた伝統の元に今の生活があり、和食（日本の食）という誇れるものを私たちは持っています。ところが今その和食文化が無くなりつつあるという危機感があります。若い世代には歴史ある日本人が作り上げてきたものを大切にしない、知ろうとしない傾向が見られます。そこで何とか私たちの和食を大切な文化遺産として残したいと、伝統的な京都の料理人たちが国に働きかけたものです。

日常の食事としての「一汁三菜」は日本人の食事をシステムとして考える時、豊かな食材を生かした調理法で、栄養のバランスが取れ、非常に良いものだと思います。

江戸の庶民の日常食

江戸の町に多くの人が集まり、時代を先取りした文化を作り、それが地方へ流れていきました。

庶民である江戸っ子は自給自足ができず、消費生活者にならざるを得ませんでした。

喜田川守貞（きたがわもりさだ）が書いた、江戸時代の風俗、事物を解説した『守貞謾稿（もりさだまんこう）』を参考に江戸の庶民の日常食をお話したいと思います。主食は飯・粥・雑炊・握り飯・麺類など、調味料は塩・味噌・醤油・みりん・砂糖ですが、醤油は庶民が使えるようになるのは江戸の中期以降のことです。『守貞謾稿』では食事の概略を江戸と京坂に分けて説明しています。江戸では朝にご飯を炊いて味噌汁、昼食は冷飯に一菜、夕食は茶漬けと香物です。ところが京坂では朝食は冷飯に茶と香物、昼はご飯を炊いて二、三種あるいは魚、または味噌汁、そして夕食は冷飯に茶と香物になります。三都では庶民も白米を食べていましたが、地方では麦や粟、ひえなどを混ぜて食べていました。

ここで稲の文化についてですが、稲から始まって玄米、白米になる過程で驚くほどたくさん利用されています。稲を取った後の稲藁は俵や縄、玄米からは糠を取り、糠漬けやあくぬきに、白米の段階では、酒、酢、みりん、味噌などの発酵食品、米粉やもち米で様々な餅菓子を、そして白米を調理加工してご飯、餅、おかきなどが作られています。さらに最後のカスは畑の肥料に使われ、次の作物のための究極のリサイクルが行われていました。

式亭三馬の書いた滑稽本『浮世風呂』には、食物関連の用語がたくさん出てきますが、当時の庶民の日常の食べ物を見ると、驚くことに現在私たちが食べているもの、知っているものばかりです。朝食の材料は、毎朝長屋の入り口まで振り売りがやって来て、その日使う分だけを買うわけです。今はなくなってしまった御用聞きなども、この頃から始まっていたといってよいでしょう。

江戸の庶民の外食

江戸の庶民の外食では、そばきり、てんぷら、にぎりすしなどがあります。蕎麦は初めはそばがきなどとして食べられていましたが、蕎麦もうどんのように麺状にする工夫が寺院でなされ、麺にする技術と汁の調味料やだしの発展・普及とあいまって上流階級から庶民にまで広まっていきました。

庶民の中から生み出された料理文化が上層部にも影響を与える現象は江戸の都市化の特徴といえます。

まとめ

江戸の都市化の発展過程をさぐることで、人口密集地における食文化の発展の経緯を知ることができます。自給自足ができない住環境が食材を売るという商売を発展させ、さまざまな工夫がなされました。

年中行事を大切にすることで、人と人とのつながりができ、それぞれにまつわる食べ物を生みだし、それを食べることによって幸せを感じ、持続可能を祈る文化を作っています。

自然のサイクルの中での精一杯の努力が日本人の知恵を花開かせ、後世の我々に教えてくれることがたくさんあります。今に生きる人々がより豊かで安全に暮らせる社会にするために、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されることは良いきっかけになることでしょう。

（＊昨年12月4日、和食の無形文化遺産登録が正式に決定されました。）

レポーターからひとこと

江戸の庶民の暮らしぶりを、絵をふんだんに使って分かりやすく解説していただきましたが、ここに掲載できないのが残念です。あぐらをかくご主人より、正座する奥さんの御膳が高くなっているのには驚きました。

参加者　108人。

【記録】文：広報部会・岡本　脩
写真：前田太門

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成25年11月24日）

「広重『名所江戸百景』周辺探訪―その9（茅場町・築地周辺）―」

今回は茅場町から佃島を経由して、浜離宮まで歩きました。少々ハードではありましたが、江戸の昔を偲びながらの散策は、なかなか意義深いものでした。参加者は141人でした。

鎧の渡し跡から永代橋

地下鉄茅場町駅を10番出口から地上へ上がり、道なりに進みますと、すぐ目の前に鎧橋が現れます。ここが「鎧の渡し」跡です。橋の脇に『江戸名所図会』の挿絵をレリーフした説明板がありますから、昔を偲ぶ縁（よすが）となります。

鎧橋の手前、東京証券取引所を含む一帯は、三河の松平和泉守屋敷跡です。屋敷跡地と日本橋川の間の道に沿って歩を進めますと、右側に兜神社があります。小さなお宮ですが、奥州征伐に向かった八幡太郎義家が、戦勝のお礼に兜を納めた兜塚が境内にあります。

▲霊岸島から対岸の石川島公園方面を望む

鎧の渡し跡へ戻って平成通りを横切りますと、山王日枝神社摂社があります。永田町の日枝神社の御旅所です。芭蕉の弟子榎本(宝井)其角がすぐ近くに住んでいたので、「其角住居跡」碑が、みずほ銀行茅場町支店前に立っています。

其角住居跡前の永代通りを隅田川の方へ向かいますと、途中に亀島川があり霊岸橋が架かっています。この橋から永代橋まで、新川1、2丁目を江戸時代には「霊岸島」と呼んでいました。明暦の大火後、深川へ移された「霊岸寺」があったことに由来します。霊岸寺移転後は、下り酒を扱う酒問屋が多く集まり、また遠島流罪を言い渡された罪人は、ここから流人船に乗せられ伊豆七島へ向かいました。

▲大坂から分祀の住吉神社

永代橋から佃島を望む

永代橋は隅田川4番目の橋として元禄11年(1698)に架けられました。当時の橋は、現在より上流の、日本橋川右岸・箱崎町と深川佐賀町を繋いでいました。広重が描いた永代橋から佃島を望む名所絵は、昔の永代橋の更に上流から描いたものです。そのつもりで佃島の方を眺めますと、高層マンションが林立する風景の中にも、川の流れは変わらず昔のままであるように思えて来ます。実際には手前に石川島があるため、佃島は見えませんでした。

鉄砲洲稲荷湊神社

亀島川が隅田川へ合流する右岸一帯が鉄砲洲、現在の湊1、2丁目付近です。ここから芝浦にかけての一帯を江戸湊と呼び、上方からの物資、俗に「下りもの」の集積地でした。ここで小舟に積み替え、運河を利用して消費地へ送りました。鉄砲洲稲荷はこの洲の突端にありましたが、明治になると外国人居留地とされたため現在地へ移転しました。その際縮小されましたが富士塚も一緒に移され、今も境内の隅に残されています。

佃島から築地

佃島は大坂佃村の漁師が、幕府から拝領した隅田河口の砂洲百間四方を埋立て造成したものです。島名は郷里佃村の名を受け継ぎ、住吉神社も大坂の住吉神社から分祀しました。祭礼に際しては大幟を立て、大きな神輿を海中渡御させる勇壮なものでした。鳥居にかかる陶製扁額の文字は、有栖川宮幟仁（たかひと）親王の手になるものです。

築地から芝浦

築地本願寺のある築地は佃島同様、元々砂洲でした。明暦の大火後移転を命ぜられた本願寺地として、与えられたのがこの砂洲です。そこで土地造成の経験があり、且つ本願寺門徒である佃島の漁師達も協力し埋め立てられたのが築地(造成地)の始まりです。

後には拡張され大半が武家地とされました。質素倹約を旨として寛政の改革を行った、松平定信の下屋敷「浴恩園（よくおんえん）」もここにあり、豪奢な庭園として知られていました。関東大震災後、魚市場が日本橋から越してきた際、廃されて魚市場用地にされたのは少々残念です。

▲「芝うらの風景」にも見える石垣の浜離宮

ここまでで約4時間。目の前に地下鉄築地駅があったためか、ここで終える参加者も多くいました。それでも半数近くが、最終目的地の芝浦・浜離宮まで歩きました。周りの景色は変わっても、離宮の石垣は昔のまま波に洗われていました。

【記録】文：広報部・光田憲雄
写真：内匠屋京子

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成25年10月23日）

新宿歴史博物館を訪ねる

新宿区立新宿歴史博物館は、平成元年（1989）に開館しました。約3万年に及ぶ新宿の歴史を時系列で展示・紹介する施設です。当初は旧石器時代から昭和初期までしたが、平成になってすでに25年、昭和初期からなら70年ほど経ちます。そこで2、3年前からは戦中戦後も加え、全部で6つのコーナーに区分展示するようになりました。

今回の学習会のテーマは、そんな「新宿歴博の歴史と概要」及び特別展「新宿の文化財」の解説を受けることでした。下永事業部会長の開会挨拶に続き、守屋副館長による挨拶及び新宿歴博の概要説明がありました。

新宿歴博の規模は江戸博には及ばないものの、区立の博物館としては大規模な方に入ります。常設展以外に、年6回の企画展があります。うち2回は、特別展及び共同企画展になっています。現在は特別展「新宿の文化財」を行っている最中です。11月17日からは共同企画展「林芙美子展」を予定しています。それ以外に、年4回の企画展がありますが、全ての企画展示を自前で行うなど、活発に活動している博物館の一つです。

続いて今野学芸員から、最新の常設コーナー「戦中・戦後」及び今回の「特別展」を中心に説明がありました。戦中は学童疎開と空襲被害。戦後は変化が激しいので、10年ごとに定点撮影した写真を展示しています。これによって、原始・古代から戦後まで新宿の通史を完成させました。また新宿歴博の特徴は、江戸時代までを考古学の対象とした近世考古学の確立、新宿にゆかりがある多くの文学者の足跡を辿る近代文学コーナーの設置です。

特別展「新宿の文化財」解説の前に、指定文化財区分の説明がなされました。新宿区はこれに加え、「地域文化財」の制度を設けています。比較的新しく身近にあるもの、通常は文化財にならないものを保護する制度です。面白い制度として各地から注目を浴びており、類似の制度を検討している自治体もあるようです。

その後、「新宿区文化財保護条例」（昭和58年制定）が30周年になるのを記念して開催する特別展の概略説明があり、展示室へ移動。現物の文化財を見ながら説明を受けました。最初は「三十六歌仙絵」や「聖徳太子画像」などの平面的なもの。続いて「板碑（いたび）」や「木喰仏（もくじきぶつ）」等の立体物。板碑とは中世の卒塔婆とのことでした。木喰は円空と並び称されますが、円空より100年後、家治・家斉の時代に活躍しました。円空が鉈彫（なたぼり）で直線的であるのに対し、木喰は鑿（のみ）使いが柔らかく全体に丸みを帯びているのが特徴です。光照寺の「地蔵菩薩座像」は、元々三井寺にあったものです。鎌倉仏の特徴として玉眼になっています。めのう観音は2代将軍秀忠の正室お江の念持仏とされるもので、かつて江戸博でも紹介されたことがあります。

禅宗（臨済宗）の五山十刹の制度は、下から諸山、十刹、五山、五山之上の順です。この制度に基づく「住職任命書」が展示され、諸山の任命書は墨印を、十刹から上は朱印を押してありました。

普段あまり見ることの出来ない文化財を、詳細な説明付きで見られたことは大変有意義でした。

参加者64人。

開館時間は9:30～17:30。観覧料は、一般300円、小中学生100円。休館日は第2・第4月曜日（月曜日が休日に当たるときは、その翌日）・年末年始。

【記録】文・写真：広報部会・光田憲雄

江戸博クリップ

「新発見物語」

学芸員　　齋　藤　慎　一

いままで担当した展覧会のうち、4回の展覧会において、新発見！の作品を紹介してきました。天璋院篤姫の女乗物、千姫の紺紙金泥経、崇源院霊廟の宮殿。そしてこの3月開催の『大江戸と洛中』展では、紅葉山東照宮御簾を。そのたびにマスコミに連携して取り上げて頂きました。とても思い出深い取り組みでした。

篤姫の女乗物は、新聞やテレビニュースで破格の取り上げ方をしていただき、センセーショナルになったことを御記憶の方も多いと思います。このきっかけは、ドラマのプロデューサーに飛び込みの電話をしたことでした。振り返ると随分と度胸があったものだと思います。しかしこの時にお世話になった方が「江」のプロデューサーになり、制作発表のご挨拶に「今回も何か」と依頼がありました。まさかとは思っていましたが、なんと崇源院霊廟の宮殿とめぐり合い、何か約束を果たしたような気持ちに。そして、続けざまに千姫の紺紙金泥経の発見。「もしかしたら私は徳川家の女性に庇護されているのでは」、なんて思いました。

ところがこの予感はまんざらでもなかったようです。「江」展終了後の返却で高野山に行った時のこと。折角だから、江のお墓に行こうと、福井県の学芸員と奥の院へ。その時、私は「先祖のお墓にも寄りたい」とわがままを言い、なかなか見つからず、迷惑をかけてしまいました。やっとの思いで見つけ出し、墓石の苔を払ってお参りしていたところ、「齋藤さん…！」と驚きの声が。なんと先祖のお墓の真裏には千姫のお墓。その一帯は徳川家ゆかりの方の墓所。なんと隣の区画は、なんと江のお墓！そうかお墓がご近所の御縁があるのか、と。

今回の御簾も女性ゆかりの品ではないものの徳川家ゆかりの作品。まだまだ御庇護はあるのかもしれません。でも、今、密かに狙っている5件目の新発見は、徳川家ゆかりではない！ それは何か。今は内緒です。その時をお楽しみに。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸名所図会を歩く…⑪

[三田八幡宮から高輪ヶ原]

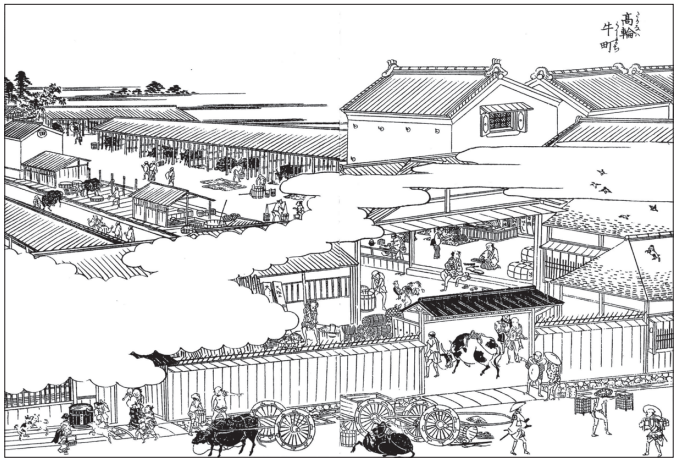
『江戸名所図会』では、長秋の序文の次に編纂の方針を定める凡例が書かれています。「およそこの編の次序は大城をもって首とし、余は南方に回環するまで北斗七星の位に配当して、すべて七巻をもって全部とす」で始まり、名所を選ぶ基準や場所の記載の説明、書物の引用方法、挿絵の見方など様々な編纂方針が記されています。

今回は第一京浜と桜田通りの間、三田台と呼ばれていた辺りを中心に歩きます。台風一過の晴天の日曜日、風に落とされたギンナンがつぶれて独特の香りを漂わせていました。

三田八幡宮から亀塚

都営地下鉄浅草線三田駅下車、第一京浜を南に下ります。札の辻交差点を過ぎて少し行くと御田八幡神社があります。図会には「三田の惣鎮守にして祭る所山城男山八幡宮と同じくして後一条帝寛仁年間草創すといい伝ふ」とあり、旧地は窪三田にあって正保年間(1644〜1648)に現地に移転したとあります。しかし、和銅2年(709)牟佐志国牧岡(白金)に創建された延喜式内稗田神社という説もあり、移転の時期も諸説あるようではっきりしません。名称も明治になってから稗田神社、三田八幡神社、明治30年(1897)には三田を古称の御田に戻し、御田八幡神社と変遷しました。図会には隔年8月15日に放生会を行うとありますが、現在では1月と5月に行われる釜鳴神事が有名です。釜に湯を沸かして音でその年の吉凶を判断する、という都内では珍しい古い信仰行事が行われる事を見ても、古社であることは間違いないようです。

本殿左側の赤い五光稲荷と御嵩神社の脇から裏に通じる階段を登ると、亀塚公園です。亀塚は竹柴寺の宅地にあった酒壷のもとに住んだ霊亀を土地の人が神に祀り、文明年間(1469〜1487)には太田道灌がこの地に斥候を置いたともあります。竹柴寺とは武蔵国から徴兵されて京都の御所に使えていた衛士と皇女が恋に落ち、駆け落ちしてきて住んだ屋敷と伝えられ、平安時代この地を通って荒廃した竹柴寺跡を見た菅原孝標女が『更級日記』に書き留め、この物語が図会でも「竹柴寺旧址」という項目で3頁にわたって引用されています。東男と京女のロマンスは江戸っ子の憧れだったのでしょうか。塚の頂上にあるこの由来を記した亀山碑はここを下屋敷とした上州土岐候によって寛延3年(1750)に建てられたものです。



▲長谷川雪旦 「高輪牛町」

周光山濟海寺から魚藍観音堂

亀塚公園を聖坂に抜けると右手に浄土宗の濟海寺があります。幕末の安政6年(1859)には日仏通商航海条約でフランス公使館となりました。その碑があるほかは、墓所には鍵がかかって一般は入れず、昔は眺望絶景で月の岬と呼ばれたこの辺りの面影もなく、何の趣も残らないお寺でした。亀塚公園方向に戻り、さらに進むと右手に幽霊坂という標柱があります。そこを下って桜田通りに突き当たり、左に行くと長松寺ですが、手前の細い道から回り道してみました。この辺りは三田寺町と呼ばれていたように、まだお寺がたくさん残っています。塀越しに枝を伸ばしたザクロの実が色づき始めていました。長松寺には「徂徠先生墓」があります。国指定史跡です。荻生徂徠は享保13年(1728)没。元禄9年(1696)31歳の時、柳沢吉保に引き立てられ食録500石を賜りますが、吉保失脚後は日本橋茅場町に住み私塾を開いて後進の育成に努めました。

長松寺から魚藍坂下に出て坂を登ると、途中にこの坂の名の由来である赤い門の魚藍寺があります。中国、唐の時代、仏が美しい乙女の姿で現れ、竹籠に入れた魚を売りながら仏法を広めたという故事に基づいて造形された観音像を安置しています。

潮見坂から高輪ヶ原

魚藍坂を登り伊皿子交差点から下って少し行くと、泉岳寺へ続く道と第一京浜へ出る道とに分かれます。昔はこの分岐までを「潮見坂」といい、真正面に品川の海が見晴らせました。今は伊皿子交差点からを伊皿子坂と呼んでいますが、分岐から第一京浜に出る坂が昔は「伊皿子薬師堂」があったためか伊皿子坂と呼ばれていました。第一京浜に出ると、道を隔てた右手に石垣と木の茂った「高輪大木戸」跡が見えます。道を挟んで両側にあった石垣は海側だけ残されて、国の史跡となっています。大木戸から少し南側、願生寺の門前辺りには「牛小屋」があり、町名も牛町となっていました。「牛を蓄する家多く、牛の数一千匹に余れり」とあるように、都のほかにはなかった牛車が御入国の頃から許可されました。このことを語る牛の供養塔が願生寺にあります。

この辺りも含めて白金から大井村の辺りまで一帯は「高輪ヶ原」と呼ばれていました。大永4年(1524)、北条と上杉の戦の舞台となった場所です。

【取材】歩いた人(文・写真とも):
広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています。)

催事案内

古文書講座

第３期の日程

古文書講座の今年度第３期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教)
- 開催日：1/8(水)、2/5(水)、3/5(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/15(水)、2/19(水)、3/19(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/18(土)、2/15(土)、3/15(土)

・時間：各講座とも
　午前の講座は10時30分～12時30分
　午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会セミナー

第 137 回「江戸の町名と俗称」

講師　北原　進さん(立正大学名誉教授)

◆江戸の地名・町名には、町人たちが呼称していたものが定着した、生活地名ともいうべき俗称、政治、行政向きの必要から付けられた公的地名、無名だった橋や建物の呼び名が、いつか公的な名称となり定着したものなど、いろいろあります。徳川氏が入府する以前からの村名、他国の地名を頂いたものなどもあります。武家地に町名がなかったともいわれていますが、本当でしょうか。切絵図などから、興味ある町名・地名を拾い集めて、その背景や町人たちの生活との関連を、考えあわせてみたいと思います。

◆講師略歴：きたはら・すすむ
元江戸東京博物館教授・研究室長、現在は立正大学名誉教授、各地で興味ある講演をされている。
- 開催日時：１月25日(土)14時～15時30分
- 申込締切：１月16日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

第 138 回「昌平坂学問所と江戸の学歴社会」

講師　加藤芳典さん(文京ふるさと歴史館専門員)

◆松平定信が主導した寛政の改革の一環として、湯島聖堂内に学問所(昌平坂学問所)が設置されました。もともとは林大学頭家の私塾だった学問所ですが、朱子学の普及を図る定信によって、幕府の直轄組織として独立することになります。学問所では、儒学に関する講義だけでなく、幕臣の子弟を対象にして定期的に素読吟味や学問吟味などの学力試験も行われていました。この試験の成績優秀者の中には、後に官僚として幕政を主導した人物も多く含まれています。今回は、学問所の設立過程や学問所における試験の様子を中心に、江戸時代の学歴社会的な側面を紹介します。

◆講師略歴：かとう・よしのり
明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程を単位取得後退学。藤沢市文書館勤務を経て、平成21年(2009)から文京ふるさと歴史館専門員として勤務、現在に至る。
- 開催日時：２月22日(土)14時～15時30分
- 申込締切：２月13日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】小林弘明(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第５回(平成 25 年度 第３回)
北区立　飛鳥山博物館を訪ねる

◆江戸時代から花見や王子の狐で有名な飛鳥山公園の中にある飛鳥山博物館を訪ねます。当博物館は平成10年、両隣りの紙の博物館、渋沢史料館とあわせて「飛鳥山３つの博物館」として開館しました。
館の沿革、特徴や展示物の解説を専門員からしていただけるよう企画しています。
花見にはまだ早い時期ですが、公園内の散策もまた、一興かもしれません。
- 開催日：３月２日(日)13時～13時30分　受付
- 開催場所：北区立 飛鳥山博物館講堂
　(１時間30分程の学習会)
　○学習会の主な内容　館の紹介
　○学習会終了(15時頃)後、常設展を見学、見学後は流れ解散となります。
- 交通アクセス：ＪＲ京浜東北線「王子」駅下車、中央口から徒歩約７分
　東京メトロ南北線「西ケ原」駅か「王子」駅から徒歩約７分
　都電荒川線や都バスでも行けますが詳細は省略します。
- 申込締切：２月６日(木)必着
- 定員：70人　**(会員のみ)**

＊**定員を超えた場合は抽選**、ご希望に添えないこともあります。
- 参加費：500円

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

『町方書上』 続巻頒布予約受付!

昨年度発刊の『町方書上』第1巻、第2巻、第7巻は予想以上の好評を得て増刷し、完売しました。今年度も2月に第3巻、第4巻、第5巻を刊行いたします。すべて予約頒布ですのでご希望の方はご予約いただきますようお願いいたします。

各巻の内容：

第3巻　根津・谷中・湯島・本郷・駒込・巣鴨・青柳・音羽・桜木・高田・雑司ヶ谷等　(本文A4判357ページ)

第4巻　牛込・市谷・四谷・鮫河橋・麹町・大久保・柏木・角筈　(本文A4判344ページ)

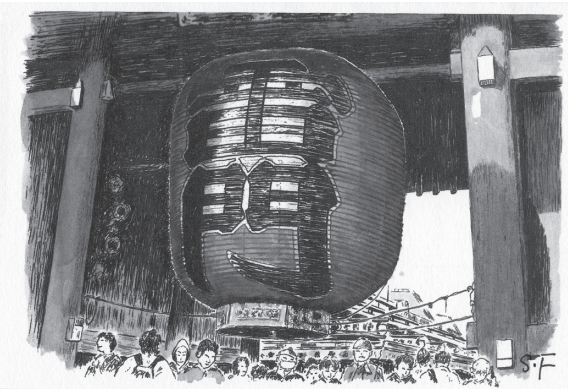
第5巻　赤坂・青山・権田原・千駄ヶ谷・渋谷・麻布・桜田・飯倉・西久保　(本文A4判376ページ)

頒布価格：　各巻2000円

受渡し方法：　原則として手渡し(古文書講座などのとき)、郵送ご希望の場合は着払い

予約締切：　1月20日(月)必着

お申込み方法：　普通ハガキに、①お求めの巻　②受渡し方法　③会員番号(必須)④氏名　を明記して江戸博「友の会事務局」宛にお送り下さい。



イラスト：福島信一さん

今年の友の会総会は5月30日(金)です。

新しく会員になられた方々の参加をお待ちしています。

総会後には会員同士の交流会があります。とても楽しい集いです。ぜひ、ご参加下さい！

会員優待のお知らせ

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「大浮世絵展」

会　期：1月2日(木)～3月2日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし1月13日、1月20日は開館)
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
　　＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展

「大江戸と洛中 ～アジアのなかの都市景観～」

会　期：3月18日(火)～5月11日(日)
休館日：5月7日および毎週月曜日
　　(ただし4月28日、5月5日は開館)
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
　　＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

特集展示のご案内

●「東海道五拾三次 ー江戸の旅事情　お伊勢参りと物見遊山ー」

会　期：1月2日(木)～2月2日(日)
休館日：1月6日(月)、1月27日(月)
会　場：常設展示室5階　第2企画展示室

「えど友広小路」原稿募集！

江戸東京に関連することで、普段あなたが思ったり感じたりしていることはありませんか？　日頃からいろいろ関心を持って調べたりしていることはありませんか？

それを文章にして、えど友広小路の「会員投稿欄」にぜひご応募下さい。広報部会ではみなさんの投稿をお待ちしています。順次掲載させて戴きます。

(原稿は江戸博「友の会事務局」宛にお送り下さい。)

お申込方法

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記して下さい。お間違いないよう、お願いします。

◆**普通はがき**に、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号**(必須)**、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
　　江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第77号
平成26年1月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、田端道宏、光田憲雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910